

＜シンポジウム (1)―12―3＞神経内科のプロフェッショナルリズム

プロフェッショナルリズムと日本神経学会一次の100年に向けて―

水澤 英洋

(臨床神経 2012;52:1028-1030)

Key words : プロフェッショナルリズム, プロフェッション (専門職), 神経内科学, 医学, 日本神経学会倫理綱領

プロフェッショナルリズムはなかなか日本語に訳しにくい。そのポイントは1. 高度の専門知識・技能を持ち自律性を有する, 2. 高い倫理と責任をとまう信頼が必須であることといえる。日本神経学会 (JSN) の各種事業は多くの委員会が担っているが、前者については専門医認定委員会, 認定更新小委員会, 施設認定委員会, 教育委員会 (卒前・式臨床研修小委員会, 卒後教育小委員会, 専門医育成教育部会, 生涯教育部会), ガイドライン統括・小委員会, 編集委員会, 用語委員会などが担当し、後者については倫理・審査委員会, 診療向上委員会, 広報委員会が担当するとともに、この度キャリア形成促進WG, 会員制度・規範委員会, 臨床部会検討WGが新設された。JSNはすでに2007年3月8日理事会承認の倫理綱領を有し、その内容は米国神経学会 (AAN) が2009年12月に出したCode of professional conductと同様であるが、関連する広汎な活動について具体的な記述をふくめてアップデートするために前述の規範委員会が設立された。

JSNのプロフェッショナルリズムとはまさに神経内科のそれであり、医学一般のものと比較してどのような特徴があるであろうか。そのためにはTable 1に示す神経内科や神経疾患の特徴を理解する必要がある。すぐわかることは、ヒトに人格をもたらし高次機能から自律神経機能までヒトのすべての活動と機能を制御する神経系を扱う神経学は医学・医療の中でも中心的存在であり、神経疾患の克服は豊かな生活と社会の必須条件ということである。また難病が多いことから臨床のみならず研究も非常に重要といえる。実際、スライドにはJohns Hopkins大学とHarvard大学Massachusetts総合病院のスタッフ数を示すが、神経内科は他のどの内科領域よりも圧倒的に大きいことがわかる。われわれにはこれらの特徴を反映した神経内科のプロフェッショナルリズムが必要である。

さて、わが国の現状をみるに、今例示した教育機関の神経内科医数をもみても、米国の現在のレベルにさえ達していないが、次の100年に向けてわれわれは如何に行動すべきであろうか。まず訴えたいことは歴史の重要さであり、1902年に始まった日本神経学会にて神経学領域が低迷し、国際的支援のもと1959年に日本精神神経学会から独立後はじめて長足の発展を遂げてきたことを学ぶ必要がある。すなわち各大学医学部には独立した神経学講座が必須である。JSNのミッショ

ンは神経学と神経内科診療の発展を通じて国民の幸福と世界に貢献することとわけて明快である。そのために、1. 法人化の完成と発展, 2. 神経内科医ならびに学会員の増加, 3. 神経学の診療・教育・研究の発展, 4. 市民と社会への貢献, 5. 国際化の推進という5つの目標を掲げて活動を続けている。

まず、1. 法人化と法人機能の強化としては、合法的、近代的、効率的かつ健全な財政に基づく学会運営 (経営観念の徹底, 事業別会計 (予算), 財務委員会による管理, HPなどによる公表, 積極的事業展開, 事務局機能強化, 適切な外注, 会員の協力など), 拡大するニーズへの対応 (IT化, 学術グループ新設, 各種委員公募, 事務局強化など), 年次学術大会の改革と発展 (学会が運営, 教育の拡充, 指導者養成など)が進められている。次いで、2. 神経内科医ならびに会員の増加としては、神経内科講座の拡充 (歴史の教訓), 独立講座空白県の解消, 人員増加, 都道府県および同医師会との連携, 医師偏在解消への協力 (日本医学会・医師会, 厚労省, 文科省, 学術会議など), 市民への啓発活動, 医学部神経学教育, 研修医対策, 神経学専任研修の改革, 高校生をふくめた啓発活動, Sports neurology, Neurological oncologyなど新しい分野の発展・開発をおこなっている。

また、本務ともいえる3. 神経学の診療, 教育, 研究の発展については、#2と共に学部での神経学教育の標準化 (コアカリ), 学部での神経学教育人員の標準化 (増加), 初期研修医への神経学教育と入会支援, 神経内科診療の標準化と個別化の推進, 神経内科診療の保険診療への組み入れ, 神経内科診療関係報酬の適正化 (増額), 高度先進医療の導入支援と普及, 治験をふくむ臨床研究の推進, 年次学術大会の改革と活用, 学術グループの新設があげられる。プロフェッショナルリズムに関しては、とくに4. 市民と社会への貢献が重要と考える。すなわち、前述のように神経内科は、豊かな社会への核心的役割を担っており、しばしば聞かれる神経変性疾患などの神経難病は“原因不明で治療法がない”というのはすでに誤りであることを自覚する必要がある。分子医学の発展した現在では特発性 (idiopathic) とか本態性 (essential) といった19~20世紀の遺産との決別が必要である。変性疾患が治るようになりつつある現代は寿命の制御といった医学・生物学の革命的变化の幕開けであり、まったく新しい時代への対応が必要である。

Table 1 神経系と神経疾患の特徴

1. 非常に広範囲に分布する
脳, 小脳, 脳幹, 脊髄, 末梢神経, 神経筋接合部, 筋, 体性神経と自律神経, など
2. 非常に広汎な機能を担う
意識, 高次機能, 運動機能, 感覚機能, 自律神経機能, など
3. 人格そのものにかかわる機能, 精神機能を有する
脳死, 脳移植?
4. 多彩な症候 (自覚症状 = 愁訴と他覚的徴候)
陽性症候・陰性症候, 体部位局在, 機能局在
5. 多種多様な疾患
慢性疾患 ~ 救急疾患
よく治る疾患 ~ 難治性疾患 (とくに変性~老化)
よくみかける疾患 ~ まれな疾患
発作性/機能性疾患 ~ 器質性/変性疾患
6. 非常に数が多い
頭痛, てんかん, 認知症, 脳卒中...

Table 2 人口の多い国々での総合世界ランキング

1	JAPAN
2	UNITED STATES
3	GERMANY
4	UNITED KINGDOM
5	FRANCE
6	ITALY
7	MEXICO
8	BRAZIL
9	RUSSIA
10	TURKEY

(Newsweek, Aug 23・20, 2010, p40)

たとえば倫理では life science ではなく life そのものの視点が必要になる。この新しい時代への挑戦において、プロフェッショナルとしての神経内科医は一義的な役割を担うと考える。現在、文部科学省は社会に役立つ脳科学という視点から脳科学研究戦略推進プログラムを進めており、著者は課題E“生涯にわたって心身の健康を支える脳の分子基盤、環境要因、その失調の解明”(生涯健康脳)を担当しているが、そこでは人々の脳や心を扱うという観点からとくに倫理が重視されている。この NeuroEthics はまさに前述の LifeEthics への架け橋になると期待される。

1~4の活動は、われわれが常に世界の最先端をリードするという側面と世界にはわれわれの働きかけを必要としている人たちが沢山いるということから5.国際化の推進に連なる。具体的には、World Federation of Neurology (WFN) や Asia Oceania Association of Neurology (AOAN), East Asian Neurology Forum (EANF) などの国際学会とくにアジア地区との協調、米国 (AAN/ANA), 韓国 (KNA), 中国 (CSN) など世界各国との協調、年次学術大会の国際化(学術セッションの英語化, ポスター・スライドの英語化, 東アジア・オセアニアからの参加者増加), 2013年からの英文学会誌 Neurology

and Clinical Neurology 刊行, 若い神経内科医の国際化支援などを進めている。

われわれのこのような活動は世界の人々にはどのようにみえているであろうか。Table 2は Newsweek 誌 2010年8月23・30日号の特集 The best countries in the world から引用したものであるが、日本は人口の多い国の中では世界第1位にランクされている。経済規模のみに限れば新興国が大きくなることはあっても、教育の高さなど生活の質すなわち神経内科の内容において世界のトップとして、多くの国々から尊敬され手本とされる国になることは難しいことではない。

最後に、次の100年に向けての日本神経学とそのプロフェッショナリズムについて以下のようにまとめたい。現在の各種委員会と新設の委員会・WGによるわれわれのプロフェッショナリズムをさらに発展させミッションにしたがい目標 #1~5を達成する。新委員会にて倫理綱領を具体的でわかりやすい形に発展させ、周知し、もって新しい領域の開拓と拡充を図り、世界に先駆けて新しい時代へ対応を進め、NeuroEthicsを超えたLife Ethicsへの道筋をつけたい。

※本論文に関連し、開示すべきCOI状態にある企業、組織、団体はいずれも有りません。

Abstract**Professionalism and the Japanese Society of Neurology—For the next 100 years—**

Hidehiro Mizusawa, M.D., Ph.D.

President, the Japanese Society of Neurology

Department of Neurology and Neurological Science, Graduate School of Medical and Dental Sciences,

Center for Brain Integration Research, Tokyo Medical and Dental University

Because neurology is a *profession* and neurologists are *professionals*, it is important to understand “professionalism” in general. Moreover, we should keep in mind the unique aspects of our discipline including 1) The wideness and complexity of the nervous and muscular systems, 2) The wide varieties of signs and symptoms, 3) The numerous diseases affecting the wide and complex systems, 4) The brain, the mother of the mind identifying us as human beings, 5) The marked disabilities due to the poor regenerative ability of the nervous system, 6) The many intractable diseases related to aging.

This unique situation of neurology requires us to have much higher standards for professionalism. Therefore, JSN has made special efforts for our members to further develop their professionalism via various methods, including our annual meeting, our journal, and the resources on our website. In order to better promote professional development, we are reforming various aspects of our society, including the structure of our annual meeting and the contents of our educational courses. Although JSN’s level of professionalism has been traditionally high enough, we should not be satisfied to be sufficiently professional, but rather should strive to be as professional as we can be.

(Clin Neurol 2012;52:1028-1030)

Key words: professionalism, profession, neurology, medicine, Ethics Code of the Japanese Society of Neurology
